行なうための組織である．最近では，WCRP に関連し，ISCCP や BSRN（地上放射収支ネットワーク）推進のために活動している．1992年夏，エストニア（旧ソ連）タリン市で開かれた国際放射シンポジウムの際に委員長は8年間勤めたフランスの J. Lenoble からイギリスの J. E. Harries (Rutherford Appleton Lab.) に交替，副委員長はアメリカの W. L. Smith (U. Wisconsin)，書記はフランスの A. Chedin (LMD/Ecole Polytechnique) である．

IRC の中には種々のテーマに対応した "Clouds and Radiation", "ISCCP", "WCRP WG on Radiation Fluxes" 等の作業委員会 (WG) が作られており，まずこれらの活動報告がなされた．雲と放射が依然主要テーマであり，ISCCP での雲量再評価，94 GHz 雲レーダ，気候モデルへの雲の取り込み方等の話が紹介された．"高分解能リモートセンシング"という新しい WG を作ってはとの提案に対しては，WG は既に十幾つと多すぎるので，まず統廃合して整理してからということになった．

次期（1996年）国際放射シンポジウムの開催地としては，アラスカのフェアバンクス市（アラスカ大学地球物理研究所）が手を挙げており，"北極気候システム研究（ACSYS）" 等極域研究の高まりの中で，海氷と放射，極域の雲分布（ISCCP 関連），極域成層圏雲 (PSCs) 等の問題に焦点を当てるのにふさわしい場所との支持の声が出た．しかし，未だ米国のバージニア州ウィリアムズバーグ市 (NASA Langley 研究所が発案）という提案も残っているとのこと．

1995年の IUGG（米国のコロラド州ボールダー市開催）で IRC として主催，共催するシンポジウムの案（スペクトロスコピー，雲とエアロゾル，ISCCP の検証，地表面放射収支，紫外線モニタリング，新しい観測法，等）が出された他，IRC としての活動を支える資金援助が求められた．後者は主にシンポジウムに参加する若手研究者や発展途上国からの研究者の旅費を援助するというのが最大のねらいで，特にこれまで貢献してこなかったが経済力のある日本とオーストラリアからの援助が期待された．他の IAMAP 委員会のあり方を知らないが，何らかの対応が求められている．

その他，IRC とは何か，という活動案内のパンフレット作りや IRC の歴史をまとめる (J. London) 等の方針が示された．

日本からの委員会は1988年からの山内と，1992年からの中島が務めている．　　（山内　恭・中島映至）

ご寄付のお知らせ

第２７期常任理事会

1993年１２月末に、故内田英治会員の奥様英子様から、故人のご遺志を活かすためにという趣旨で、日本気象学会に５０万円のご寄付がございました。

ご寄付の有意義な使途について、1994年２月３日に開催いたしました常任理事会で慎重に検討した結果、故人の日頃のお気持ちにも添うことが出来るということから、「国際学術交流基金」の一部に組み入れさせて頂くことにいたしました。

会員の皆様にご了解頂くよう、ここに報告いたします。